

「何気ない日常が愛おしかったりする」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ とってもささやかな話

夏休み中のある朝の話です。薄く開けた校長室のドアの隙間から入ってこられる方がおられます。県教委で学校整備を担当している方。「校長先生と話したかったんですよ」と切り出されます。「体育館の空調工事のお礼をバレーボール部の生徒が伝えに来たんですよ。それが嬉しかったので…」と言われます。

確かにそのことについては通信の15号に書きました。でも頭の中が「？」だらけになった私は尋ねました。「ひょっとして本校のホームページを見てくださったんですか？」と。すると「はい。隣家が神戸高校生のいる御家族で、そのことを教えてもらったので読んだんです」とのこと。さりげなくいい話ですよ。

体育館の空調工事に神高生が喜び、そのことでお礼を告げに来てくれたことを私が喜び、その話を知ったことで空調工事に関わってくださった方が喜ぶ。喜びが世界を巡り巡っています。戯言のような私の通信ですが、それなりに「喜び」と「繋がり」を生んでくれていることに気づいたのは有り難いことです。

そう言えば進路通信を持参してくれる小原先生は、よく私に通信の感想を聞かせてくれます。事務室の住友さんは「月曜日を楽しみにしています」と言ってくれます。先週の通信については星野先生が「ラ・フォンテーヌが活躍したのは7世紀でなく17世紀ですよ」と指摘してくれました。記憶上の脱字、恥ずかしい限りで慌てて正しいものに差し替えましたが、丁寧に読んでいただいているのは嬉しいことです。

8月に開催したオープンハイスクールに寄せられた中学生や保護者の方々からの感想からも、自治会メンバーの活躍が多く「喜び」と「繋がり」を生んでくれたことが伝わってきます。

『案内してくださった生徒の皆さん、とても礼儀正しくて爽やかで、さすがだと思いました。校舎もとても素敵でした。ここで勉強できたら素晴らしいな、と思うシーンがたくさんありました』

『施設見学は娘の憧れの先輩が案内してくださり、お話もできて、たいへん喜んでいました』

『たくさん質問しましたが、どれにも丁寧に対応してくださって、ありがとうございました』

『他校のオープンハイスクールにも参加させていただいていますが、神戸高校の内容がいちばん魅力的で、あっという間に時間が経過しました。娘がかなり踏み込んだ内容の質問をしたことが親としてはとても嬉しく感じました。手がなかなか届かないというイメージが先行していましたが、前向きに親子で取り組んでいきたいです』 『行事がとても楽しそうだった。神戸高校に行きたいです』

合唱コンクール目前、校内は歌声で溢れています。早朝に一誠会館に立ち寄ると1年2組が『群青』を歌っていました。2011年に東日本大震災を経験した南相馬市立小高中学校の平成24年度卒業生と同校の音楽教諭によって作られた歌。震災当時、生徒達は中学1年生。106名いた生徒のうち2名が津波の犠牲になり、97名は原発事故による避難で全国に散り散りになった彼らの歌。当たり前の日常の大切さを改めて教えてくれますね。



日常と言えば、こんな場面にも出くわします。昼休み、ただでさえ暑いのに校庭に出てサッカーボールを蹴る女生徒が3人。微笑ましくてシャッターを押したものの、ふと思います。「これ、盗撮かな」と。そこでカメラをしまいかけると私に気づいた彼女たちは笑顔で手を振ってくれます。許可を得た気分でもう一度カメラを構えると、このポーズ。神戸高校の日常は実に愛おしいものです。

さて、全クラスの歌を聴きたかった私ですが、3日とも出張が入ってしまいました。そうするとコンクールを勝ち抜いた6クラスの歌を音楽会で聴けるだけですかね。つらいけど、仕方がないですね。だから願います。思いのこもったあなたのクラスの歌、聴けると嬉しいな。

